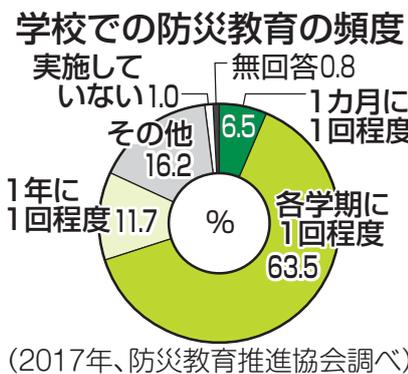


くらしの中から考える。

避難訓練

「一日は「防災の日」でしたね。今から百年近く前の一九二三年に、東京などに大きな被害をもたらした「関東大震災」が起きた日です。今年も各地で大雨による土砂災害や洪水などが起きています。いざというときに安全な場所に逃げられるように、学校でも行われる避難訓練。どんな訓練をすればいいのか、この機会に考えてみませんか。（佐橋大）



「釜石の奇跡」を知っているだろうか。二〇一一年三月の東日本大震災で巨大津波に襲われた岩手県釜石市で、海岸近くの学校にいた小中学生約五百七十人が一緒に高台に避難し、全員無事だった。生徒らは日頃から、自分たちで登下校時の避難計画を立てて訓練し、授業で津波の恐ろしさなども学んでいたという。災害や防災の知識を問う「ジュニア防災検定」を主催する防災教育推進協会（東京）が一七年、全国の教育委員会に聞いた調査では、学校で防災教育を行う頻度は各学期に一回程度が63・5%と最も多かった。内容は避難訓練が96・7%を占め、防災講話（59・9%）、防災施設の見学（58・0%）、防災マップ作り（40・1%）などが続い

◆ 全員無事の奇跡 ◆

子ども自身が考え実践

同協会事務局長の浜口和久さん（五三）は「校内放送で地震を知らせて、決められた通りに机の下に入り、集合場所の校庭に向かうという形式的な避難訓練を行っている学校も少なくない」と指摘。「なぜこの行動をするのか学ぶことも大切。火災や水害など災害の種類に応じた避難方法を確認したり、事前に子どもたちに知らせずに抜き打ちで実施したりと、より実践的な訓練が必要だ」と訴える。

「自分の住んでいる地域の被害想定を調べることから始めよう」と呼び掛けるのは、防災教育に取り組むNPO法人「減災教育普及協会」（横

基本と臨機応変さが必要

浜市）理事長の江夏猛史さん（四六）だ。「地震などの災害の実態に近い、根拠を持った避難訓練」を提唱。「学校や家にいる時、想定される最大クラスの地震が起きたら、体や頭を守る姿勢がとれるか、棚から物が落ちてこないかを確認し、棚を固定するなど事前でできる対策をとる。その上で、発生時にとるべき行動を考えて訓練するべきだ。自分で判断する力がつけばいい」と話す。

災害時の被災者支援に取り組むNPO法人「レスキューストックヤード」（名古屋）代表理事の栗田暢之さん（五三）は「基本の繰り返しも必要だ」と考える。被災地では「揺れたと思ったら、家族の中で一番早く子どもたちがこたつに潜り込んだ」「真夜中

の地震で子どもの寝室に駆け込んだら、子どもたちは枕と布団で頭を保護していた」という話を多く聞いたという。「基本を体で覚えることも、臨機応変に考える力を身に付けることも、両方が大切」と力を込める。

意見送ってください

皆さんの学校ではどんな避難訓練をしていますか。備えについての意見を送ってください。紙面で紹介したお子さんの中から抽選で図書カードをプレゼント。応募は〒460 8511 中日新聞

聞（東京新聞）生活
部「学ぶ」係＝ファクス052 (222) 5284、メール seikatu@chu



nichi.co.jp＝へ。QRコードからもワークシート兼応募用紙もダウンロードできます。16日締め切り。